

北海道雄武高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 108名

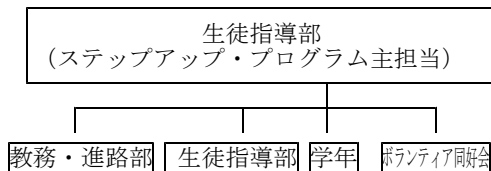
1 取組の特徴

ピア・サポートトレーニングをHRや全校生徒、ボランティア同好会の活動などに取り入れ、校内外におけるサポート活動や小・中学生との交流を通して、より良い環境づくりに取り組んでいる。

2 取組のねらい

幼少期から固定的な友人関係や人間関係に悩み、自尊感情の低い生徒が多く見られることから、ソーシャルスキルトレーニングを行い、自尊感情を高め、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指すとともに、不登校や中途退学の未然防止に努める。

<組織図>



3 取組の経過

4月	児童センターでのピア・サポート (毎月1回実施)	8月	ピア・サポートトレーニング (1・3学年)
	児童センターでの学習サポート (毎週木曜日実施)	9月	アセス・「ほっと」の実施 (全学年)
	ピア・サポート研修会 (年間11回実施)	10月	小学生と高校1年生の小・高交流会
	ピア・サポートトレーニング (1学年)	11月	ピア・サポートトレーニング (3学年)
5月	ピア・サポートトレーニング (1学年)		外部講師によるピアサポート学習会 (1・2学年)
	アセスの実施 (全学年)		外部講師による校内研修会 (町内教員)
6月	ピア・サポートトレーニング (1学年)		中学生へのピア・サポート活動
	宿泊研修におけるトレーニング	12月	外部講師によるピア・サポート学習会
	保健講話におけるトレーニング		ピア・サポートトレーニング (3学年)
7月	外部講師によるピア・サポート学習会 (全学年)	1月	ピア・サポートトレーニング (1学年)
		2月	アセス・「ほっと」の実施 (1・2年)

4 取組の内容

1 生徒理解に向けた取組 (「アセス」・「ほっと」の実施)

昨年と同様に5月・9月・2月に「アセス」を実施し、前年度の結果と比較し、時間経過及び成長の段階に応じて「要サポート」の度合いの変化の分析及び9月・2月に「ほっと」を実施し、分析した結果を活用して生徒個人及びHRの状況などの理解に努めている。

アセスの分析結果から、3年生は「教師サポート」「学習的適応」の上昇が見られた。2年生は9月の結果が5月の結果よりも「友人サポート」「向社会的スキル」が低くなった。1年生においては、「非侵害関係」が減少したクラスと「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害関係」が増加したクラスがあり、クラスによるばらつきが見られた。

「ほっと」の結果によるとルールやモラルを守ることができ、注意することもできるが、人前で緊張して話せず、友達に本音で話したり聞いたりすることができない集団であることから、ステップアッププログラムの取組は居心地の良い学校・HRをつくる上で、重要な取組である。

4 取組の内容

2 外部講師によるピア・サポート学習会（7月、11月、12月）

(1) ねらい

高校生活においての様々な困難を乗り越える力をつけ、人間関係で最も大切なコミュニケーションの力を身に付け、仲間を支えられる人間関係づくりを目指す。

(2) 対 象 全校生徒、保護者、町の教育関係者、本校職員

(3) 内 容

ア 講師によるアサーショントレーニング（7月） 全学年対象

三つの自己表現からアサーティブな自己主張を学習し、怒りへの対応と表現を学んだ。

イ 講師によるコミュニケーショントレーニング（11月） 1・2年生対象

上手な断り方や短所を長所にリフレーミングする方法を学んだ。

ウ 講師によるコミュニケーショントレーニング（12月） 全学年対象

ネットトラブルを通してコミュニケーションの大切さとポジティブメッセージを考えた。

(4) 成 果

ア 学年縦割り班で実施し、各班に配置した3年生のサポーターが中心となって、効果的な自己主張や怒りへの対応を班内で協力し合いながら学習する雰囲気が見られた。

イ 短所を自己開示した班員に対し他の班員がリフレーミングする交流がスムーズに行われた。

ウ 学年別の班編成をし、班長を中心とした活動を通して日頃のコミュニケーションの大切さを学んだ。



(5) 生徒の感想

友人などと良い関係を作るために必要なコミュニケーションの方法や自分が心配していたネットトラブルについて色々知ることができて良かった。

3 教員校内研修会（11月）

7月には希望者による教育相談、12月にはストレスマネジメントの研修会を行った。

11月には町内の小・中・高の生徒指導担当者によるピア・サポートの研修を行った。

5 次年度に向けて

1 成 果

ア 中途退学者が減少した。

イ 保健室来室者が5割以上減少し、相談時間及び休養時間についても短縮が見られた。

ウ アセスによる「向社会的スキル」の向上が見られ、「非侵害関係」の改善が認められた。

また、生徒間のサポートする関係が向上し、委員会においても積極的な発言が見られた。

エ コミュニケーションが苦手な生徒が、HRでの昼食場面で会話をすることがなかなかできなかった生徒が、HRでの昼食場面で会話を増やした。

オ 小学生との交流を通して、小学生のことを考えた上での言動が増えた。

2 課 題

ア 授業や日常生活でのコミュニケーション能力向上に向けた言語活動の充実。

イ ピア・サポートトレーニングを日常生活で活用するためのコミュニケーションスキルの向上。

3 次年度に向けて

ア アセス・「ほっと」の実施及び分析と活用。

イ コミュニケーションスキルを高めるための、ピア・サポートトレーニングの継続。

ウ 生徒（ピア・サポーター）による校内でのピア・サポート活動の充実。

北海道留辺蘂高等学校

課程 全日制
 学科 総合学科
 生徒数 156名

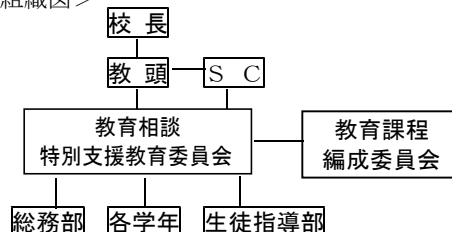
1 取組の特徴

高1クライシス未然防止を含め、本事業4年目の本校は、入学当初から集団カウンセリングやコミュニケーショントレーニングを積極的に展開し、対人関係スキルや自己有用感の向上に力を入れている。また、「アセス」や「ほっと」を定期的実施し、生徒の実態をきめ細かく把握するとともに、個人面談を多く取り入れて、支援を必要とする生徒の早期発見と学級満足度を高める学級経営に努めている。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションスキル育成トレーニングの蓄積促進と研修を通して、どの教員も構成的グループエンカウンターを実践できる体制づくりとそのスキルを活用した教科指導を促進する。
- 2 「アセス」や「ほっと」の分析と効果的な活用について研修を進め、教員のスキルアップを図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月・担任による入学式後及び学級開きにおける集団カウンセリングの実施
 ・特別支援コーディネーターによる宿泊研修における集団カウンセリングの実施</p> <p>5月・外部講師による集団カウンセリング</p> <p>6月・バス見学会全体発表会開催
 ・「アセス」の実施と分析 (全学年)</p> <p>7月・担任による集団カウンセリングの実施と
 ・外部講師による支援と講評</p> <p>8月・集団カウンセリング研修会への教員派遣</p> <p>9月・外部講師による教員研修会『発達障害の理解と支援』開催</p> | <p>9月・「アセス」の実施と分析 (1学年)</p> <p>10月・担任による集団カウンセリングの実施
 S Cによる個別カウンセリングの実施
 「ほっと」の実施と分析 (1学年)</p> <p>11月・ようこそ先輩まとめ・分野別発表
 ・S Cによる個別カウンセリングの実施</p> <p>1月・担任による集団カウンセリングの実施</p> <p>2月・外部講師による集団カウンセリングの実施
 ・S Cによる個別カウンセリングの実施
 ・高校生ステップアッププログラム事業における成果の検証と次年度計画作成</p> |
|---|---|

4 取組の内容

1 教員主導の集団カウンセリング(4/9、4/17、4/26、7/24、10/16、10/30、1/17)

- (1) ねらい 人間関係づくりエクササイズやコミュニケーショントレーニングを実施し、生徒の自己有用感とコミュニケーションスキルを高める。
- (2) 内容 入学直後の学年集会や宿泊研修、ホームルーム活動において「担任自己紹介3択クイズ」「ぼく・わたしのやりたいことベスト3」「座席表をつくってみよう」などのSGEを実施した。他に、「心の解放の窓」「傾聴トレーニング」「話し合いのトレーニング」を実施。
- (3) 成果 生徒から「昨日より多くの友達と話すことができた。」「はじめて会った子と話せてうれしかった。」「改めて自分のやりたいことを考えることができた。」などの感想があり、生徒のコミュニケーションスキル向上とクラスのリレーションを高める効果が期待できた。



学級開きでのSGE

4 取組の内容

1 講師主導の集団カウンセリング(5/22、2/12)

- (1)ねらい コミュニケーショントレーニングを通して、生徒の他者理解を深めるとともに、講師の手法を教員が学ぶ。
- (2)内 容 中野武房教授を講師に、「イメージシクロ」「トラブル回避の応答」「プラスのストローク」のエクササイズを通して人間関係づくりの基本となるコミュニケーションの方法を学んだ。
- (3)成 果 生徒から「みんな色々な考えを持っていることがわかった。」「グループで意見を出し合って共有することができた。」「もっときちんとした答えが言えるような人になりたい。」などの感想があり、トレーニングを楽しみながら、他者理解を深めることができた。



中野教授によるSGE

3 教員研修会(9/5)

- (1)ねらい 発達障害について学ぶ機会を設定し教員の理解を深める。
- (2)内 容 中野武房教授を講師とし、「発達障害の理解と支援」をテーマに講演を行った。
- (3)成 果 発達障害について改めて学ぶことによって、視野が広がり、生徒の困り感を理解する力をつけるための一助となった。



中野教授による教員研修会

4 「アセス」と「ほっと」の実施と結果の分析(6/24、10/9、10/23)

「アセス」を1年生は6月と10月の2回、2・3年生は6月にそれぞれ1回実施し、分析を行った。また、1年生は「ほっと」を10月に実施し、学級経営の指針を立てることができた。

5 各教科での取り組み

トレーニングで身に付けたスキルを活用して、国語、数学、英語、理科、地歴、保健体育、家庭、福祉、芸術など、ほとんどの教科で積極的な取り組みを行った。ペアワークやグループ学習、シェアリングなどは日常的に行っており、自然に得意な生徒が苦手な生徒に教えるなどのピアサポート活動が行われている。



学級担任によるSGE

5 次年度に向けて

1 成 果

- ア 中途退学者が昨年度より減少した。
- イ 一人当たりの欠席日数が昨年度より減少した。
- ウ 入学当初は自分の意見を言ったり、グループで話し合うことがうまくできなかつたが、トレーニングを重ねることで、お互いを認め合い、共感・傾聴する姿勢が育成されてきた。仲間意識が育ち、一人のために全員が動けるようになってきた。欠席や怠学傾向も減ったことから、コミュニケーションスキルは向上してきていると思われる。
- エ 1学年の「アセス」2回目の結果では、「生活満足度」「対人的適応」「学習的適応」の全項目で1～2ポイント増となった。
- オ コミュニケーションを意識した活動（ペアワーク・グループワーク・ピアサポート等）が、各教科で積極的に取り組まれた。

2 課 題

- ア 教員の更なるスキルの向上。
- イ 生徒の状況に応じた効果的なトレーニングの計画・実施。
- ウ コミュニケーショントレーニングで身に付けたスキルを教科等でも活用する実践の充実。

3 次年度に向けて

- ア 講師の助言を得ながら教員が行うトレーニングの質を高め、トレーニングを実施できる教員を増やしていく。
- イ 生徒の状況に応じた効果的なトレーニングが展開できるようにしていく。

北海道新得高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 72名

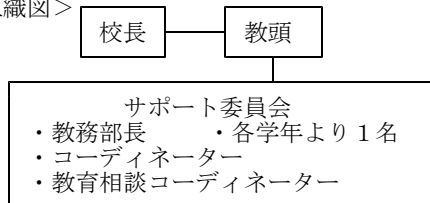
1 取組の特徴

コミュニケーションスキルトレーニングを実施することにより、生徒にコミュニケーションスキルを身につけさせ、望ましい人間関係を形成する力を育成する。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションスキルトレーニングを通して、良好な人間関係を形成する力や集団生活において問題を解決する力を身に付けさせる。
- 2 教員の「ピア・サポート」に対する理解を深める。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 宿泊研修「エンカウンターとアサーション」
 5月 進路講話「コミュニケーション能力について」
 6月 全校面談週間
 7月 全町教育「なかよし学習塾」ボランティア
 8月 子ども理解支援ツール「ほっと」実施
 9月 SCによる「コミュニケーションスキルトレーニング」①
 SCによる個別カウンセリング
 SSWによる個別カウンセリング</p> | <p>10月 「ふれあい広場」ボランティア
 SSWによる「進路に関わるコミュニケーションスキル」
 11月 SCによる「コミュニケーションスキルトレーニング」②
 教員校内研修「ピア・サポートについて」
 12月 子ども理解支援ツール「ほっと」実施
 1月 SCによる「個別カウンセリング」
 全町教育「なかよし学習塾」ボランティア</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 スクールソーシャルワーカー (SSW) による「進路に関わるコミュニケーションスキル」
 - ① ねらい 「ディセント・ワーク」を通して、自尊感情について考えさせる。また、「ピア・カウンセリング」を通して相手の意見を受け入れ、認め合うことについて学ぶ。
 - ② 対象 1年生
 - ③ 内容 人間らしい生活を営むために求められる労働条件や賃金、休日日数等について「ディセント・ワーク」を通して学び、日本の現状とともに進路について考えた。安心して話ができる手法「ピア・カウンセリング」を通し「正座派か体育座り派か」「今はまっていること」「新得高校について」、一人ずつ意見を話した。
 - ④ 成果 グループワークが苦手な生徒については、「ピア・カウンセリング」を通して、話しやすい雰囲気の中で、コミュニケーションへの自信につなげることができた。
 - ⑤ 感想 生徒の感想から、「働くためには自分自身の努力や自分のコミュニケーション力が必要であることがわかった」「また座談会をしたい」「みんなの話が聞けて良かった」などの感想が多く見られた。

4 取組の内容

2 函館大谷短期大学 中野 武房氏による「コミュニケーションスキル」トレーニング

① ねらい 専門家による演習を通して生徒のスキル向上と良好な人間関係を形成する力の育成を目指す。

② 対象 1年生、2年生

③ 内容 9月と11月の2回実施
・「話の聞き方」「要点を得た話し方」
・「私の解放の窓」「プラスのストローク」
・「怒りの解消」

④ 成果 トレーニングを通して、自己理解、他者理解につながり、クラスの交流を深めることができた。

⑤ 感想 「コミュニケーションをするときは、聴く姿勢や態度がとても大切だということがわかった」「グルーピングでは、自分のあまり話さないことを話せて、みんなのこともよく知ることができた。」「怒りをためているからイライラすると思い、怒りの解消法を見つけようと思った。」などの感想が多く見られた。



3 函館大谷短期大学 中野 武房氏による校内研修「ピア・サポート」

① ねらい 教職員の「ピア・サポート」への理解を深める。

② 対象 教職員

③ 内容 「ピアサポート」の概要及び演習

④ 成果 教科や部活動でグループワークを導入するなど、生徒のコミュニケーションスキル向上に活用することができた。教職員間の共通理解が深まり、協力体制の構築が進んだ。

5 次年度に向けて

1 成果

① 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果（8月及び12月実施）

ア 1年生

同じ目標に向かい協力し合う「仲間づくり」が課題であった。講師によるスキルトレーニングによりクラスの雰囲気は良くなり、クラスメイトとの距離感が縮まった。「仲間づくり」「相談」項目の数値は「ほっと」2回目では他の項目よりも上昇した。

イ 2年生

「拒否」の項目の数値が低かった。「怒りの解消」の演習をし、他人との怒りや解消法の違い、「いじめ」の構造を学ぶことにより「ほっと」2回目は「拒否」の項目の数値が他の項目よりも上昇した。

② 教職員の「ピア・サポート」への理解が深まり、コミュニケーションスキルにつながる活動の協力体制が進んだ。

2 課題

① 不登校への対応やボランティア活動の取組時期を考えると、「コミュニケーションスキル」トレーニングの時期は4月～6月の早期に実施しスキル向上に努める必要がある。

② コミュニケーションの苦手な生徒に対して、個別・少人数トレーニングで継続的に指導する必要がある。

③ 子ども理解支援ツール「ほっと」で明らかになった課題を計画的に教育活動に取り入れ指導する必要がある。

3 次年度に向けて

① 「コミュニケーションスキル」の計画的・継続的な指導

② コミュニケーションの苦手な生徒への個別・少人数トレーニングの時間の確保

③ 「ほっと」のさらなる有効活用のため、専門家による研修会の実施

北海道幕別高等学校

課 程 全日制
 学 科 普通科
 生徒数 107 名

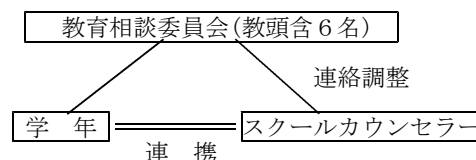
1 取組の特徴

- ・ 構成的グループエンカウターの手法を用い、「相手を受け容れる」「相手の良いところを認め合う」「相手を大切にすること」を育成して集団づくりを進める。
- ・ 行事や体験的な学習活動を通して、コミュニケーションスキルの向上を図る。

2 取組のねらい

- ・ 人との関わりを大切にする人間関係を構築する
- ・ 生徒の「社会化」をすすめる

<組織図>



3 取組の経過

4～7月 構成的グループエンカウター(2)

- ・ 自己を語ろう
- ・ 四つの幸せの条件
- ・ 竹の節目私の節目
- ・ 強い人間と弱い人間
- ・ 「恥」とは何か
- ・ スポーツ大会振り返り
- ・ 学校祭振り返り・スペシャルな人

7月 異世代コミュニケーション

- ・ パークゴルフ授業(全)

9～12月 構成的グループエンカウター(2)

- ・ 我慢すること
- ・ 介護体験学習の振り返り
- ・ 見学旅行の準備期間から帰ってくるまでの期間の振り返り
- ・ 頑張るってどういうこと

1月 教職員研修

- ・ スクールカウンセラー講習

12～2月 異世代コミュニケーション

- ・ そば打ち学習(全)

2～3月 構成的グループエンカウター(2)

- ・ 進路の必要条件
- ・ 2年間の振り返り

※()内の数字は実施学年

4 取組の内容

1 構成的グループエンカウンター 【助言者 スクールカウンセラー大道まき子氏】

① ねらい 社会を生き抜くために身に付けておくこと。

ア 相手の良いところを積極的に探す努力をする

イ 相手を受け入れ、自分を受け入れてもらったことを実感する

ウ 物事のとらえ方をポジティブにする

② 4月～3月、2年生を中心に随時実施

③ 成果 構成的グループエンカウンターを2年間

(24年は高1クライシス未然防止事業) 取り組んだ結果、生徒の考え方に変化が見られた。昨年度は、悪ふざけがあったり、「楽しかった」「またやりたい」という単純な感想であったが、今年度は、じっくりと深く考え、心を見つめて引き出したものを言葉にする場面が多く見られた。これまで、人前で自分の意見を言うことを苦手として



いた生徒も、積極的に自分の思いを発表できるようになった。

④ 感想

ア 「四つの幸せの条件」

・「存在する」という言葉にはガツンとやられました。悪いところも良いところも全部相手が必要だということです。このことが一番共感できました。

・「人から必要とされる人」は、責任感のある人や一生懸命になる人、人の役に立とうとしてくれる人だけと思っていましたが、この授業で、「存在する」ということが大切だと言うことを知りました。今は自分のことは好きだけれど、前は、自分のことがあまり好きではなかった時、物事を楽しく捉えることができなかった。自分のことを好きでいるのは大切だと思った。



イ 「進路の必要条件」

・自分の意見を短く、分かりやすく伝えるのは難しいと思った。意見交換していると、新しい発見があると思った。(授業中に) 意外と聞いたり書いたりしていたことを覚えていると思った。

・自分と違う意見を聞くのは楽しかった。人の意見を聞く良い機会となった。

・グループで話したら、忘れていたことを思い出せて良かった。この授業は、卒業後、働くときにも役に立つと思う。

・一人では考えることができなかったが、誰かと考えたりすると、たくさん意見が出ると思った。

・周りの人と一緒に考えたり、応えたりすることで、様々な意見が出るのがわかった。社会に出ても、このことを忘れないで、頑張りたいと思った。

2 異世代コミュニケーション

- ① ねらい 町民の方を講師に迎え、幕別町にゆかりのあるテーマの学習を進め、地域の特徴的な文化を体得するとともに、交流を通して地域住民と生徒との相互理解を深める。
- ② 対象 全学年
- ③ 7月 パークゴルフ授業
12～2月 そば打ち授業 幕別町民の協力
- ④ 成果 地域の方から直接手ほどきを受けることで、学習効果が向上するとともに、生徒が大人とのコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。講師からは学年の進行につれて技量や態度面で生徒の成長する姿を見られることが嬉しく、協力を継続していきたいと好評を得ることができた。



5 次年度に向けて

1 成果

- ① 不登校生徒数は、ここ数年で大幅に減少した。さらに、不登校だった生徒も、現在、ほぼ休まず登校している。
- ② 「悪ふざけ」、「無自覚」によるいじめが減少し、孤独な人を作らない努力を生徒自らの考えで行えるようになった。
- ③ 公正な物の見方、考え方ができるようになり、「人のために何ができるか」を考えるようになった。

2 課題

- ① 生徒は、物事の受取り方を肯定的にし、「好き」「嫌い」だけで判断せず、我慢強さを身に付ける必要がある。
- ② 学校は、校内研修を充実させ個々の教職員のカウンセリング・スキルをさらに向上させる必要がある。

3 次年度に向けて

- ① 生徒の集団としての成長を個人の成長につなげ、個々の進路実現に接続する。
- ② 子ども理解支援ツール「ほっと」を有効活用する研究を進める。

北海道釧路明輝高等学校

課程 全 日 制
 学 科 総 合 学 科
 生徒数 5 9 6 名

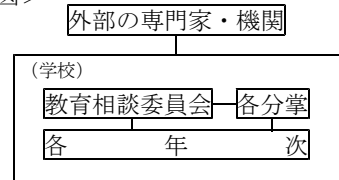
1 取組の特徴

生徒自身が自己理解及び他者理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を図るため、構成的グループエンカウンター (SGE) やライフスキルトレーニング (LST) など様々なエクササイズを実施する。また、生徒間はもとより生徒と教職員との良好な人間関係を構築するとともに、学校やホームルームに対する帰属意識を高めるため、教職員の教育相談に関わるスキルアップを図る研修会を実施する。さらに、個別面談を重視し、各年次において、年間複数回実施するとともに、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実を図る。

2 取組のねらい

全ての生徒の学校生活に対する満足度を高め、不登校やいじめの未然防止を図るため、生徒一人一人を大切にする積極的な生徒指導や生徒の人間関係づくりのスキルアップ等に関する教職員の指導力の向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月～5月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報の収集
- ・宿泊研修におけるリレーションシップトレーニング (1年次)
- ・個別面談による生徒の現状や家庭環境の把握及び学校生活における不安や悩み等の聞き取り (全年次)
- ・生徒情報の共有 (教職員間)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习
- ・SGE 「高校生活への期待」 (1年次)
- ・SGE 「インタビュー」 (1年次)
- ・SGE 「スゴロクトーク」 (1年次)
- ・SGE 「生活の充実度」 (2年次)
- ・LST 「ディスカッション」 (2年次)
- ・LST 「いじめを考える」 (2年次)

7月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・個人面談による学校祭前後における友人関係の変化や不安、悩み等の聞き取り (全年次)

9月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・LST 「聞き方」 (1年次)
- ・LST 「話し方」 (1年次)

10月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习

11月

- ・Q-Uテストの実施 (全年次)
- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストに基づく個人面談 (全年次)

12月

- ・SGE 「私のセールスポイント」 (1年次)
- ・LST 「断り方」 (1年次)
- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストに基づく個人面談 (全年次)

1月～3月

- ・Q-Uテストの有効活用に関する校内研修
- ・カウンセリングに関する校内研修
- ・こども理解支援ツール「ほっと」の実施
- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・集団カウンセリング (1年次)
- ・ソーシャルスキルトレーニング (2年次)
- ・Q-Uテストの実施 (2回目)
- ・次年度に向けたアンケート (1、2年次生及び教職員対象)
- ・今年度の事業評価

4 取組の内容

1 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 塚本 久仁佳 氏）

- (1) 日 時 平成25年7月5日（金）～現在
- (2) ねらい 生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、満足度の高い生活を送ることができるよう支援する。
- (3) 対 象 希望生徒又は保護者
- (4) 内 容 ア 生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言
イ 生徒又は保護者へのカウンセリングの結果に関わる教職員への助言
- (5) 成 果 カウンセラーの助言により、教職員が生徒理解を深めるとともに、生徒個々に対するカウンセリングのスキルアップを図ることができた。
- (6) 課 題 単発的なカウンセリングのため、不安や悩みの一時的な解消にとどまる場合もあることから、継続的かつ計画的なカウンセリングの取組が必要である。

2 ライフスキルトレーニング（本校教諭）

- (1) 日 時 平成25年9月17日（火）～現在
- (2) ねらい コミュニケーションの意義と重要性を理解させ、生徒のコミュニケーションスキルの向上を図る。
- (3) 対 象 1年次生
- (4) 内 容 「話の上手な聴き方」、「上手な話し方」
「上手な断り方」など
- (5) 成 果 ロールプレイを通じて、生徒がコミュニケーションスキルの大切さを理解したことにより、シェアリング時において他者の意見を真摯な態度で傾聴する姿が見られた。



宿泊研修における人間関係づくり

（生徒の感想から）

- ・ 他人との適切な会話の仕方が少し理解できたと思います。相手の立場になって会話のキャッチボールをすると、相手も自分も言いたいことを話せるし、聞くこともできると思います。
- ・ 自分が悪いことをしたらちゃんと謝ること、謝り方にも色々あること、謝り方によっては相手が不愉快に思ったりするから、丁寧に謝ることが大切です。
- ・ 言い方には気をつけ、全てを言わなくてもいいと思います。言いたいことがあるなら勇気をもってはっきり言うべきだと思うし、相手が言いたいことがありそうなら、威圧的な態度はしないで、優しく聞くべきだと思います。
- ・ 友人が失敗したときに、物事を慎重に客観的に見て、冷静に一方からだけではなく相手と共に解決していくことが大切なことだと思いました。
- ・ 言い方や、相手のこと、自分のこともしっかり発言することも大切です。みんなが、できるだけ不快にならないような対応が必要になってくると思います。
- ・ 話し方や態度に気をつけないと相手も自分も不快になると思うので、人との関係を壊さないように、気づかいなども大切だと思いました。

- (6) 課 題 身に付けたコミュニケーションスキルを日常生活において生徒自らが実践、評価することが主旨であることから、継続的なエクササイズを実施する必要がある。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 学校やホームルームへの帰属意識が高まったことにより、中途退学者及び転出者が減少するとともに、今年度は各ホームルーム担任や養護教諭への相談もほとんどなかった。

年 度	21	22	23	24	25
中途退学者数	1	2	3	1	1
転出者数	1	2	4	4	0
合計数	2	4	7	5	1

(平成25年度は、平成26年1月末現在)

(2) スクールカウンセラーが頻繁に来校し、生徒との個別カウンセリングを実施するとともに、各年次における個別面談の充実により、外科的要因を除く不定愁訴等により保健室へ来室する生徒が前年度の1,506人(平成25年1月末現在)から1,248人(平成26年1月末現在)と約250件(17%)減少した。特に、1年次生女子は約150人(約40%)減少した。また、特別支援教育に関する校内研修会にスクールカウンセラーが参加するなどして、生徒や教職員に関する情報の共有化が進み、効果的なカウンセリングにつながった。



スクールカウンセラーによる研修の様子

(3) 特別支援教育に関する取組との相乗効果により、生徒一人一人を見つめようとする教職員の意識が高まった。

2 課題

(1) 生徒のいわゆる「小さなサイン」を見逃さないとする姿勢が十分でない事例も散見されたことから、教職員の一層の意識変革が求められる。

(2) スクールカウンセラーによる個別カウンセリングは、かなりの日数や時数を要することもあり、先方の都合も考えると、今年度以上の数の招聘候補者を手配しておく必要がある。

(3) 講師の都合もあったが、当初の計画どおりに取組を進めることができなかったことから、本事業推進に対する校内体制の再構築を図る必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 生徒指導部、教育相談委員会とは別にプロジェクトチームを組織し、教職員への意欲付けや意識改革を促すことで、本事業及び各取組における目的の達成や効果的な推進を図る。

(2) 継続的に、朝の職員打合せ等において「研究指定事業ニュース」を教職員に周知するなどして事業推進に係る適切な進行管理を行う。

(3) 今年度については、本事業導入以前に「Q-Uテスト」の実施を決定し、費用を徴収していたことから「Q-Uテスト」優先となったが、次年度は、「Q-Uテスト」と「ほっと」との関連性を吟味し、年度当初と年度終わりに「Q-Uテスト」、年度当初の1ヶ月後程度に「ほっと」を実施することとし、「ほっと」及び学級適応検査等の効果的な実施を工夫する。

(4) スクールカウンセラー招聘に係る措置を最大限に生かすため、年度当初に3～4名の招聘候補者を手配する。

(5) 本事業における取組と本校の教育活動の中心であるキャリア教育の取組や生徒指導及び特別支援教育に関する学校経営方針との融合を図り、継続的に積極的な生徒指導を推進するよう工夫する。

北海道白糠高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 238名

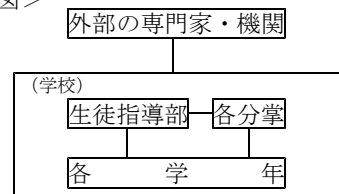
1 取組の特徴

- 教職員と生徒、さらに生徒同士の信頼関係を深める取組を意図的・計画的に実施する。
- 外部機関と連携し、コミュニケーションスキルを高めるための「場」を効果的に設定する。

2 取組のねらい

生活面や学習面で課題を抱え、人間関係をうまく構築することができずに第1学年で退学する生徒が多いことから、本事業を活用し、人間関係形成能力や自己表現力を育成する集団研修や講演会、個別カウンセリングを実施する。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学前の中学校訪問による生徒の情報共有 ・全校一斉個別面談（全学年） ・家庭への連絡や訪問による生徒状況や家庭環境の把握（全学年） <p>5月～6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒情報の共有化と個別指導 ・Q-Uの実施及び個人面談（第1学年） <p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校祭に向けた取組を活用した集団づくり ・全校一斉個別面談週間 <p>9月～2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング | <p>9月、3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くしろ若者サポートステーションと連携した進路学習（第1学年） <p>9月～2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「サポステの日」の設定（月に2回程度） <p>11月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクールカウンセラーによる生徒理解研修（教員対象） <p>12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Q-Uの実施及び個別面談（第1学年） ・体育祭に向けた取組を活用した集団づくり <p>2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊研修におけるコミュニケーショントレーニング（第1学年） |
|---|--|

4 取組の内容

1 全校一斉面談週間（4月）

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 生徒が仲間づくりを進め、良好な人間関係の構築を図ることができるよう生徒の思いを聞き取るとともに、生徒と教師との信頼関係の構築を図る。
- (3) 内容 放課後、担任が生徒全員と面談を実施する。
- (4) 成果 面談を通して生徒一人一人の思いや考えを把握したことにより、生徒がよりよい集団づくりを進めることができるとともに、生徒と教職員との信頼関係が深まった。
- (5) 課題 他者に思いを伝える方法が未熟な生徒が多いことから、落ち着いた雰囲気の中で1対1の面談を実施し、人と会話する経験を積ませることが必要である。

※ 全校一斉面談週間は7月も設定し、教職員の生徒理解を一層図ることができた。

2 スクールカウンセラーによる生徒理解研修（講師：北海道教育大学 伊田 勝憲 氏）

- (1) 対象 教職員
- (2) ねらい 教職員が生徒理解を深め、人と関わるための方法を学ぶ。
- (3) 内容 理論から見た青年期の現状、適応をめぐる諸問題と対応の方向性、学習しない理由を踏まえた動機付けの方向性など、3つのテーマの講話を実施した。
- (4) 成果 「生徒指導」や「生徒理解」について、理論的に理解し、今後の生徒指導の指針を共有することができた。

3 スクールカウンセラーによるカウンセリング（北海道教育大学 伊田 勝憲 氏、北海道公立学校カウンセラー 若菜 順 氏）

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 自己の抱える問題を明確にすることにより自己理解を深め自己肯定感を高める。
- (3) 内容 月2回程度、希望生徒を対象にしたカウンセリングを教育相談室において実施した。
- (4) 成果 スクールカウンセラーによる個別の面談を実施することにより、生徒の自己理解が進んだ。

4 くしろ若者サポートステーションと連携した進路学習及び「サポステの日（在学中から卒業後を見据えた月2回のサポステ相談室）」の設置

- (1) 対象 進路学習は第1学年生徒対象、サポステ相談については全校生徒対象
- (2) ねらい 働く意味を考えさせるとともに、グループ学習を通してコミュニケーション能力の育成を図る。
- (3) 内容 「何のために働くのか？」というテーマについて、グループ別に討議した。
- (4) 成果 各グループに配置した、くしろ若者サポートステーションのスタッフの支援により、生徒が意見を出し合い、互いに認め合うなど、生徒の自己理解や他者理解が進んだ。

5 宿泊研修における構成的グループエンカウターの実施

- (1) 対象 第1学年
- (2) ねらい 生徒の相互理解と仲間づくりを推進し、ホームルーム及び学年における良好な人間関係の構築を図る。
- (3) 内容 ネイパルあしよろのスタッフを講師としたコミュニケーショントレーニング
- (4) 成果 人間関係づくりのエクササイズを実施したことにより、生徒の相互理解が深まり、ホームルームや学年への帰属意識が高まるなど集団づくりに効果があった。



グループエンカウター（宿泊研修）

5 次年度に向けて

1 成果

Q-Uを実施した第1学年は、非承認群が38%と、自主的に活動する意欲が低く、認められたいと願っている生徒が多く、自己適切に表現することができず、物に当たったり黙り込んだりする生徒に対して、担任との個別の面談や個々の生徒に焦点を当てた指導を行ってきたことから、コミュニケーション能力の向上を図ることができた。

- ・平成23年度25人だった中途退学者数が、平成24年度年には15人、平成25年度には13人まで減少した。
- ・平成24年度には6.9日だった生徒1人あたりの欠席日数が、平成25年度には4.7日まで減少した。



サポステスタッフとの連携
（1学年の進路学習）

2 課題

- (1) 担当者が変わることで、取組が停滞することが懸念されることから、担当者が交代した場合においても、継続的に取り組むことができるプログラム及び年間計画を作成する必要がある。
- (2) 今年度、「Q-U」による生徒の実態把握を個人面談に活用することができたことから、次年度においては、「Q-U」と「ほっと」を関連付けた効果的な活用を図る必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 今年度の成果を踏まえ、継続的に取り組むことができるプログラムの開発及び「Q-U」や「ほっと」による生徒の実態把握とカウンセリング等に関連付けた年間計画を作成する。
- (2) スクールカウンセラーやくしろ若者サポートステーションとの連携の強化を図る。

北海道根室西高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 157名

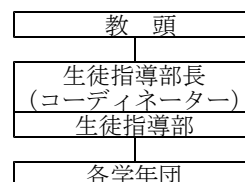
1 取組の特徴

生徒のコミュニケーションスキルの向上を図り、良好な人間関係づくりが行われるよう、学校組織体制の充実を図る。

2 取組のねらい

- (1) 生徒のコミュニケーション能力を向上させることで、対人関係を原因とするトラブルの未然防止と、自分の感情を適切にコントロールする手法を身に付ける。
- (2) 教員の生徒理解スキルを向上し、生徒理解の深化を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月 宿泊研修 (1 学年)
 5月 ピア・サポート研修 (1 学年)
 教育相談研修 (教員)
 教育相談週間 (1・2 学年)
 家庭訪問週間 (1・2 学年)
 交通安全啓発活動 (有志生徒)
 6月 Q-Uテスト (1・2 学年)
 「ほっと」 (1・2 学年)
 教育相談週間 (1・2 学年)
 花壇整備 (有志生徒)</p> | <p>10月 みらいの地域マスター秋季研修 (生徒会)
 どんさんこ☆子ども全道サミット (生徒会)
 Q-U研修 (教員)
 11月 ハイスクールフェス
 (生徒会・北方領土研究会)
 12月 Q-Uテスト (1・2 学年)
 「ほっと」 (1・2 学年)
 1月 教育相談週間 (1・2 学年)
 2月 さんすう・数学クラブ (有志生徒)
 Q-U・「ほっと」研修 (教員)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

- (1) 教育相談週間 (5月7日～5月17日、6月24日～7月5日、1月20日～1月31日)
- ねらい：Q-Uテスト、「ほっと」の調査結果に基づく教育相談を行い、生徒との信頼関係の土台をつくる。
 生徒が1対1でのコミュニケーションを取ることができるようにスキルを身に付ける。
 - 対象：1・2 学年
 - 内容：学年団の教員と生徒が1対1で15分程度の面談を行う。第1回の面談内容は家庭訪問週間の資料として活用した。また、面談の情報は生徒ごとにサーバー上の教育相談メモに入力することで情報の共有を図る。
 - 成果：教員と生徒とのコミュニケーションを深める機会を作ることで、生徒との人間関係をより深いものにした。また、面談内容を家庭訪問の参考資料とすることで家庭との連携強化の助けとなった。

4 取組の内容

(2) ピア・サポート演習 (5月10日)

○ねらい：演習を通してコミュニケーションスキルの育成を図る。

○対象：1学年

○内容：函館大谷短大の中野武房教授を講師に迎えて、プラスのストロークや笑顔の大切さについての講義・演習を実施した。

○成果：最初はコミュニケーションをとることに硬さが見られたが、教員や教育実習生のサポートを受けて活動するうちに活発に演習を行うようになった。また、教育相談週間における面談と合わせて実施することで、生徒のコミュニケーションスキルの向上に役立てた。

(3) 花壇整備 (6月9日)

○ねらい：地域住民との共同作業を通してコミュニケーションスキルの活用を図る。

○対象：部活動・生徒会を中心として有志生徒(約40名)

○内容：町内会と共同で、学校前の通学路にある花壇の花植えと地域清掃を実施した。

○成果：生徒は作業を通じて地域の高齢者や子どもたちとコミュニケーションをとることができた。



(4) ハイスクールフェス (11月23日)

○ねらい：他校生徒会と協力して活動することでコミュニケーションスキルの活用を図る。

○対象：生徒会・北方領土研究会

○内容：根室西高校と根室高校で実行委員会を作り、根室管内の各高等学校・高等養護学校が日頃の取組などを地域に発信した。

○成果：コミュニケーションスキルを活用して他校生徒会とディスカッションや運営を行うことができた。また、生徒会活動への意識が高まり、その後の計画において活発に意見を出すなど意欲的な活動が見られた。



5 次年度に向けて

(1) 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

・中途退学者数の減少が見られた。不登校生徒数は変わらず極めて少ない人数であった。

イ その他の指標による評価

・前学年よりも1人あたりの欠席日数と保健室の相談利用の回数が減少した。

ウ 「ほっと」の実施により把握した、生徒のコミュニケーションスキルの概況

・「ほっと」の結果によって、各クラスの特性を踏まえた上で、校内における様々な取組の前後での生徒の変容を把握した。対人関係基礎項目の値が上昇するクラスが確認された。

エ 生徒の変容した姿

・生徒との信頼関係が構築され、指導上のトラブルが減少した。器物破損も減少するなど感情のコントロールができる生徒が増加した。

・対外的な活動に参加することで生徒会をはじめとした生徒の意識が高まり、積極的に行事の企画の提案、運営が行われた。

(2) 課題

ア Q-Uテストと「ほっと」の一層の活用を図る。

イ ピア・サポート活動の充実を図る。

(3) 次年度に向けて

ア Q-Uテストや「ほっと」の分析において、個々の質問項目や男女間の結果の差、個人の変化への考察を行う。

イ 年間を通して計画的にピア・サポート演習を行うことで、より一層ピア・サポート活動を充実する。